様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　８ 月 １７ 日現在

機関番号：４１５０１
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2020
課題番号：１９Ｋ１３１３０

研究課題名（和文）冷戦期ディストピア表象における集団的記憶と終りの意識の研究

研究課題名（英文）Collective Memories and the Sense of an Ending in Representations of Dystopia in the Cold War Era

研究代表者
小林　亜希（KOBAYASHI, AKI）

山形県立米沢女子短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：８０７１１３６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、第二次世界大戦から冷戦期までのディストピア表象における「集合的記憶」（collective memories）と「終りの意識」（the sense of an ending）に焦点をあて、分析したものである。特に、1950年代に活躍した作家たち（William Golding, John Wyndham, Mervyn Peake）の諸テクストに基づいて、冷戦期の作家たちが共有したと思われる「集団的記憶」とエンディングにおける「終りの意識」について明らかにしようと試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
1950年代に活躍した作家たちの多くは従軍経験があったにも拘わらず、彼らの戦時における集団的記憶とディストピア表象を比較検討した研究は多くない。第二次世界大戦から冷戦期に至る連続性に着目し、集団的記憶とディストピア表象の関係性を分析した点に本研究の学術的意義がある。また、本研究は、1950年代の虚構物語に通底する「終りの意識」(the sense of an ending)に着目することで、特定のジャンルに包摂されない第二次世界大戦以降の集団的記憶について考察するものである。

研究成果の概要（英文）：This research focused on “collective memories” and “the sense of an ending” in representations of Dystopia from World WarⅡ to Cold War era. The aim of the research was to examine the common collective memories and the sense of an ending in narrative structure in the 1950's Apocalyptic fiction, based on the texts of William Golding, John Wyndham, and Mervyn Peake.

研究分野：20世紀イギリス小説

キーワード：イギリス文学　集団的記憶　終りの意識　ディストピア　冷戦期

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究の着想は、以前に取り組んだ科研費若手研究（B）「核時代におけるディストピア文学の想像力と戦争表象の研究」（2016～2018 年度）による資料調査とテクスト分析を行う中で見出されたものである。以上の研究成果から、二つの仮説を得ることができた。一つは、第二次世界大戦の集団的記憶と冷戦期の想像力の混淆が、ジャンルとメディアを超えて表象されているのではないかということ。もう一つは、同時代の記憶と想像力の問題が、1950 年代における虚構物語のエンディングにおける「終りの意識」と関係しているのではないかということである。当該研究は以上の仮説を敷衍・発展させたものとして構想された。また、*The Day of the Triffids* (1951)、*Lord of the Flies* (1954) 、*Pincher Martin* (1956) 、*Gormenghast* (1946-58) 等にも顕著に見られるように、1950 年代におけるディストピア小説の多くは閉塞的な空間が描かれ、独自のエンディング構造を有している。ジャンルの異同に拘わらず、ディストピア表象に通底する冷戦期の「終りの意識」は核戦争の恐怖だけでなく、第二次世界大戦の破滅的「終り」の体験から生じた集団的記憶の残滓を共有している可能性があるのではないか。本研究は以上の仮説に基づき、Anne Whitehead の *Memory* (2009) をはじめとする近年の記憶研究を参照しながら、テクストの分析を進めてきた。

２．研究の目的

「終りの意識」を論じた研究の嚆矢として Frank Kermode の *The Sense of Ending: Studies in the Theory of Fiction* (1967) が挙げられるが、Kermode はロマン主義からモダニズムまでの文学テクストを対象としており、終末論を哲学的に考察しているため、冷戦期の文学テクストには言及していない。そのため、本研究は「終りの意識」を冷戦期のコンテクストに位置付けることで分析を試みるものである。また、1950 年代に活躍した作家たちの中でも、ウィリアム・ゴールディング（William Golding） と ジョン・ウィンダム（John Wyndham）はノルマンディー上陸作戦に従軍し、マーヴィン・ピーク（Mervyn Peake） はベルゼン強制収容所で壮絶な体験をしている。これらの作家たちのアーカイヴにアクセスし、同時代の言説を参照することにより、これまであまり言及されることのなかった作家たちの第二次世界大戦における経験と記憶を検証することが当該研究の当初の目的の一つであった。しかしながら、研究を進めていくうちに、作家たちの個人的体験から集団的記憶を再構成することは困難であることがわかったため、同時代の言説や表象、特に、冷戦期以前の戦争表象や 19～20 世紀の海洋冒険小説の影響等も考慮に入れながら調査し、物語論を援用したテクスト分析を行うことにした。以上の方法により、冷戦期の集団的記憶と終りの意識を考察することが本研究の主要な目的である。

３．研究の方法

1) 図書館を利用した文献調査と整理：当該研究者が所属する研究機関では基本的な文献の調査が困難であるため、インターネット及び国内の大学図書館（東北大学附属図書館、東北学院大学附属図書館）を利用し、書誌情報の収集と文献調査を行った。また、イギリスの大英図書館（the British Library）では、19 世紀から 20 世紀中葉に至るまでの様々な表象と先行研究について文献調査を行った。

２）収集・整理した文献調査をもとにしたテクスト分析：上記で収集・整理した文献を比較・参照しながら、同時代の文学テクストに通底する集団的記憶とエンディングにおける「終りの意識」を考察した。また、適宜、物語論 (Narratology) と記憶研究を援用・参照することで、エンディ

ングの構造について分析を試みた。

４．研究成果

令和元年は物語論を援用した *Pincher Martin* (1956) のテクスト分析を始めることから研究を開始した。当該テクストにおけるエンディングの構造は、ジャンルを問わず 1950 年代の終末小説に通底する問題を孕んでいるように思われる。当該年度における主な成果は、シンポジウムにおける口頭発表と大英図書館での資料調査によるところが大きい。

日本英文学会関西支部大会シンポジウム「冒険の残滓―『ロビンソン・クルーソー』から 300 年」（服部典之、小林亜希、大川淳、於奈良女子大学、2019 年 12 月 8 日）における発表「ヘテロトピアのロビンソン―反ロビンソン物語における〈終り〉の意識」では、ウィリアム・ゴールディングの『通過儀礼』(*Rites of Passage*, 1980) のエンディングを分析し、海軍士官として第二次世界大戦に従軍したゴールディング自らの戦争の記憶が、想像力を介して 19 世紀の船の表象に上書きされている可能性を指摘した。この小説では、19 世紀における暴力の表象、とりわけ「赤道祭」（Line crossing ceremony）が、第二次世界大戦の記憶と結び付けられて表象されているように思われる。以上のシンポジウムにおける発表を通して、冷戦期の集合的記憶に内包されているのは、第二次世界大戦から冷戦期までの限定された事象に留まるものではないこと、19 世紀英国にその萌芽が見られる “masculinity” の表象、第一次世界大戦をも含む海軍の表象等が関わっている可能性を見出すことができた。尚、このシンポジウムのプロシーディングスは日本英文学会関西支部のホームページに発表したが、今後改めてまとめ直したい。

大英図書館の資料調査では、第一次世界大戦、ノルマンディー上陸作戦を含む第二次世界大戦、ホロコースト、ロンドン大空襲等、きわめて広範囲な集合的記憶が複合的に表象されている可能性が浮かび上がった。また、*Pincher Martin* (1956) のインター・テクストとされる Taffrail の *Pincher Martin, O.D: A Story of the Inner Life of the Royal Navy*（1916）の初版を参照し、*Pincher Martin* (1956)でも執拗に描かれる描写のモデルと思われる情景のいくつかが挿絵化されてることを確認した。このように、冷戦期のテクストであっても、第二次世界大戦以前の戦争表象が重ねて表象されている可能性がある。まだ検証は十分ではないが、冷戦期イギリスの集合的記憶を加害者としての記憶と被害者としての記憶が混淆した複雑なものとして捉え直すことができるかもしれない。

令和二年度は、コロナ禍のため当初予定していたイギリスでの資料調査および国内図書館での横断的な資料調査を進めることができず、研究に大幅な遅れが生じた。そのため、前年度の資料調査において重要であると判断した書籍を購入し、ウィリアム・ゴールディング、ジョン・ウィンダム、マーヴィン・ピークの短編が所収されたアンソロジー *Sometime Never* (1956) 等を参照しつつ、テクスト分析を進めることになった。また、これらの成果は日本英文学会東北支部のシンポジウム「英米文学における記憶と想像力」において発表する予定であったが、コロナウイルス流行の影響によって次年度に延期となった。以上の理由から、十分な成果を上げたとは言い難いが、前年度の資料調査をもとにテクスト分析を行うことにより、問題の所在を焦点化することができたように思われれる。

今後も以上のテーマを敷衍・発展させながら研究を進めたい。また、期間内に発表することはできなかったが、以上の研究成果の一部を日本英文学会東北支部のシンポジウム（令和三年度 11 月開催予定）で発表する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 小林亜希	４．巻 50巻2号
２．論文標題 『ピンチャー・マーティン』における〈終り〉の意識―意識の言説化をめぐって	５．発行年 2020年
３．雑誌名 NEW PERSPECTIVE	６．最初と最後の頁 4－13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 小林亜希
２．発表標題 ヘテロトピアのロビンソン―反ロビンソン物語における〈終り〉の意識
３．学会等名 日本英文学会関西支部第14回大会シンポジウム「冒険の残滓――『ロビンソン・クルーソー』から300年」
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関